

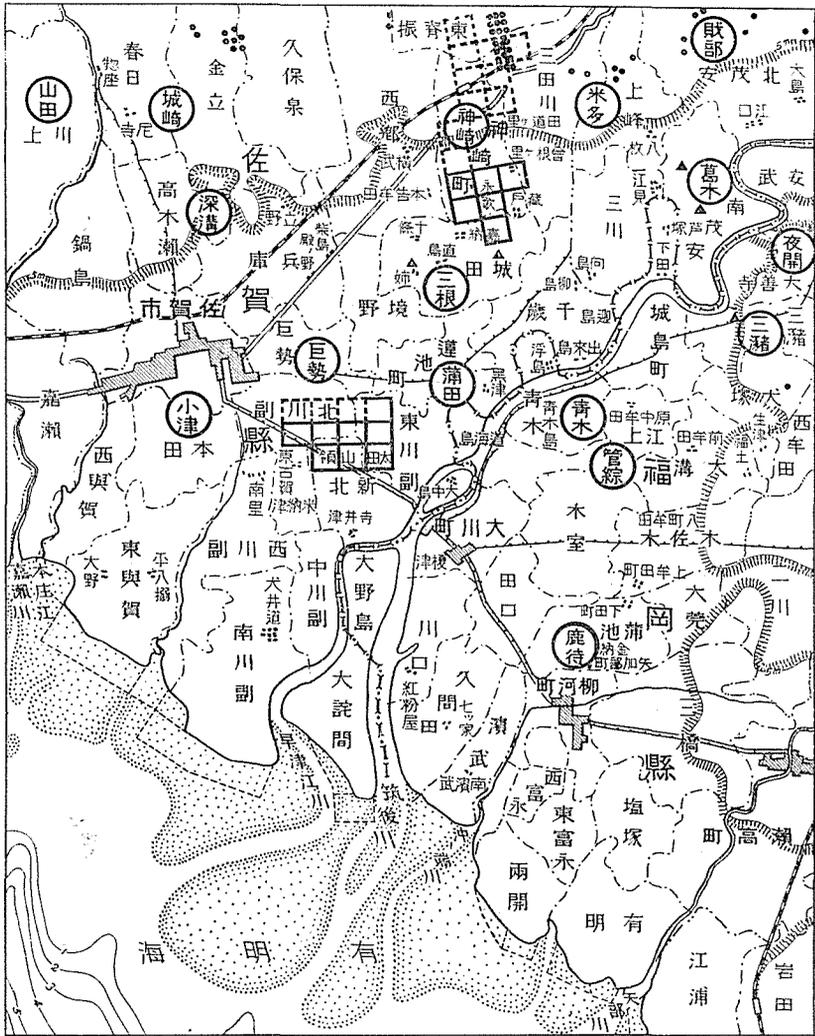
## 筑後川下流平野の開発 (上)

米 倉 一 郎

九州西部の大灣入なる有明海は、古來筑紫潟の名を以て知られてゐる。筑後川は北九州六ヶ國に互る約三千方籽の流域の水を集めて灣頭部に朝し來り、此處に廣大なる沖積平原を生成してゐる。我々の述べんとする筑後川下流平野とは即ち此の地域であつて、西は嘉瀬川東は矢部川に至る佐賀柳河の沃野を云ふ。我々は此の平野の開発を論ずるに當り、先づ其の自然環境を叙して住民活動の舞臺を明かにする。

有明海は島原及宇土半島に圍まれたる細長き灣入にして、其の潮汐干満の差は、日本群島中第一位であり、筑後川口に於ては五米<sup>1)</sup>に達する。故に一度河川によりて海中に搬出されたる土砂も、再び潮流によりて海岸に運ばれ、河川の沖積作用は大いに助長促進さるゝ事となり、尙地盤の隆起も與りて有明海は急激に埋没せられて淺海となつた。斯くて沿岸には満潮に隠れ干潮に顯はるゝ干潟を生じた。之れ筑紫潟の名を得た所以であつて、其の成長陸化せられたものが現時の平野を成すに至つたのである。今海岸を繞りて隱顯する最大幅員九籽に達する干潟は、正に平野の原始景觀を示すものと言ふ事

第一圖 筑後川下流平野歴史地圖



筑後川下流平野の開發

第十七卷 第一號

三七

名郷抄名和(地名) 跡遺里條井塚貝▲▲ 地布散器土ヒ及墳古●●

(尋)線深等 域區畫計拓干 域區出露湖干大最

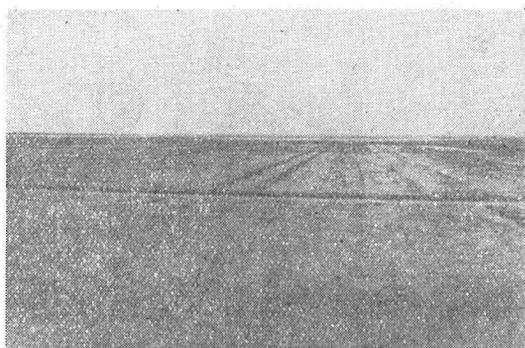
界村町----- 界郡市----- 界國縣-----

車電ヒ及道鉄便輕----- 場車停ヒ及道鉄----- 道國-----

1 : 200 000



ができる。此の干潟に於ては、河川の末流を中心として、數多の滲形成せられて縦横に貫流してゐる。滲は或ひは江湖エゴと稱せられ、其の下底は干満の水流により深く掘鑿せられて谿谷狀を成し、其の兩岸は蠣カキの好んで繁殖する所である。平野の水系は此の潟地の滲に基くもので、潮汐の干満による淡水の



第二圖 干拓つれあゝる干潟

逆流は、筑後川本支流を始め諸川に於て、略高度四米附近にまで達する。此の部分は干潟に於ける滲の延長なれば亦同様に江湖若くは江と稱せられ、水深大にして、古來舟楫の便に富んでゐる。平野の特種なる風景をなす溝渠は俗に堀ホリと稱せられるが、其の發生の基礎も亦江湖に求むる事を得べしとは、此の地方の産なる農學部古賀教授の教示せらるゝ處である。溝渠の下底及兩岸に蠣層の現はるゝもの多きは、嘗て潟地に於ける滲筋に當れる事を證するものであらう。溝渠の分布が五米乃至七・五米等高線を以て限らるゝは、此の線が最近に於ける有明海岸なりし事を暗示するものと思はれる。筑後川が久留米地峽よりして此の有明の入江に注入するに至りて、其の運搬する多量の微細なる土砂による入江の沖積は急激に進展したのである。五米等高線に當りて溝渠中に蠣層を有する神埼町西部の横武を以て第一次海岸線とすれば、西姉貝塚線は約三籽隔り、和名類聚抄

所載の巨勢蒲田郷の地は是より更に三籽にして、鎌倉末に於ける海岸なる南里米納津は更に二籽餘、戰國末の其れなる犬井道は更に三籽餘、而して現代に至る迄又三籽餘の前進をなしてゐる。北部程筑後川本流より遠ければ、其の沖積は時間を要せしなるべく、鎌倉時代以後に於ては後述する如く埋立によりて人工的に促進せられてゐるが、今假に、之等の事情を措きて、和名類聚抄所載郷以南の沖積速度を概算すれば、約百年に一籽の割合に達してゐる。以て筑後川沖積作用の極めて旺盛にして平野の生成甚だ新しき事を知るに足るであらう。筑後川は柔軟なる平野上に、自由に其の河道を選んだもので、地形圖上に明瞭なる舊河跡の多くは戰國時代以後のもので、下流右岸の浮島、道海島等は、河口の大中島、大野島の如く、慶長の頃迄は河中の三角洲であつた。

平野の土壤は、北なる背振山塊の花崗岩、東なる高良山塊の古生層、更に筑後川上流山地の安山岩等を母岩として生成せられてゐる。洪積層は平野の北部及東部に於ては七・五米乃至五米等高線附近に迄及び、山麓より平野への漸移地帯をなして居る。該線以下は最も低平なる沖積層の埴土帯である。此處は筑後川を始めとして、その他諸川の運搬物質が、有明海に齎らされ、其の潮流によりて混合され濾過されて堆積せる處で、本邦に於ける海成沖積層が砂土多くして地味瘠薄なる中にありて、比類無き沃野をなしてゐる。<sup>2)</sup>

次に斯くの如き沖積平野の生成に與り、更に是と共に住民の生活を規定し來りし氣候に就いて述べ

る。九州は内地中最南方に位置し、殊に此の平野は北方に背振山塊、高良山脈等ありて、日本海斜面と隔てられ、爲に四季溫暖である。亞熱帶植物なる樟が古來繁茂せる事は、肥前風土記が、佐賀の古名佐嘉を樟榮國と解釋せる事を以ても想像される。降雨は六、七月に最も多い。之は所謂梅雨によるもので、楊子江流域に發生せる低氣壓が、筑後川流域に沿ひて東進する場合に最も激烈である。普通は朝鮮海峽を通過して日本海南部に出づるを以て、此の平野に於ては、さまで甚しくないが、筑後川上流山岳地方は相變らず多量にして、日量二百耗に達する事が少くない。是れ筑後川の流出力を増大して洪水を惹起する主要原因である。又南洋に發生せる颱風が九月初旬北上して九州近海を通過するに際して暴風雨を見る事がある。特にその中心進路を此の地域に取るが如き場合に於ては猛烈なる暴風と豪雨とを齎し突發的大洪水を起す。昭和五年七月此の地を襲ひしものは此の例である。天正六年より大正七年に至る三百四十六年間に現はれたる筑後川の洪水總數は百十八回にして、三年に一回の割合を示し、稍顯著にして被害の記事あるもの五十四回にして六年に一回となり、特に激烈にして多大の損害ありしものは十八年に一回現れてゐる。<sup>3)</sup>



第三圖 聚落と溝渠

筑後川の沖積作用の極めて旺盛なるは、主として此の頻繁なる洪水に基くと言はねばならぬ。斯くの如く、六、七月は常に水害に苦めらるゝ程の降雨があるが、八月は一般に寡雨にして、極端なる旱魃を見る事少くない。既往三十五年間に於ける佐賀測候所の観測によれば、六、七月の降雨量が各々四百耗を超へた年は十二回、十回に及ぶが、八月の降雨量が五十耗に達せざる年が九回現れてゐる。而して八月は稻の最生長期に當れば灌漑水の必要が極めて大である。此處に於てか、平野に自然に發生せし川及江湖は夙に灌漑に利用せらるゝ事となり、爾來平野の開發は必然的に溝渠の掘鑿を伴ひて起つた。而して、平野の沖積層が有機質に富む粘土層厚き爲、地下水不良にして、井戸による良質の飲料水を得る事不可能であつた故、聚落も亦溝渠を必要とした。斯くて堀多き水田に配するに堀を繞らせる聚落を以てして、今日見る如き特種の風景を現出するに至つた。我々は之れより、主として此の特異なる文化景觀の分析を試みて、以て本平野開發の跡を裏づけんとするものである。

(1) 潮汐表上卷 水路部

(2) 土壤學講義 一六八頁 大工原銀太郎博士

(3) 筑後川の洪水と豫報 福岡縣測候所

## 二

未だ平野の大部が海底なりし頃、汀に程遠からざりし洪積層丘陵地には、山の幸海の幸に恵まれて

人類の定住が始められたであらう。彼等は所謂彌生式土器を使用するに至れるもので、大陸交通の要地なる北九州海岸へは北部山地の諸構造谷を通して往來され、早くより大陸文化に接してゐたと思はれる。金石併用時代の隆盛は甕棺に伴ひて出づる多くの鏡、銅劍、銅鉾に見るべく、やがて多



第四圖 高城町附近の地形と溝渠

數の古墳群現はるゝや、或ひは裝飾を有し或ひは石人石馬等を備ふるものもありて、文化の程度と大陸の影響とを物語つてゐる。偕、我が國の農業が、古來水田による稻作なる事は、古語拾遺、大祓の詞に畔放、溝埋、槌放の類農業の妨害となるべき行爲を天津罪と言へる事によりても明かで、溝池等の灌漑水供給の施設は、大陸技術の輸入により更に完備するに至つたと思はれる。筑紫田部が遠く播磨の開墾に従事せる事は、<sup>1)</sup>即ち彼等が優れたる技術者たりし

故なるべく、又以て此の地域の開発が極めて古くより起りし事を想像するに足る。されば國造磐井は此處に據りて富強を致し、遂に朝威に反抗する程の勢力をなすを得たのであらう。斯くの如く、文化の發達早ければ、人口の増殖も亦大なりしなるべく、低濕なる平野の開発も亦夙に起るに至つた筈で

ある。やがて國郡の時代となりて、條里の制實施せらるゝや、廣濶なる平野に於ては、最も適切なる地割なれば、行はれ易く、又長く維持せらるゝ事となつた。即ち亂流する川及江湖を整理して井を設け、一は以て灌漑水源となし、他は以て潮汐の影響を絶ち、更に新に多くの溝渠を掘りて條里の區劃を定むると共に、井水を導きて耕作灌漑に便したと思はれる。肥前風土記によれば米多の井は水味鹹にして海藻ありと言はれてゐる。<sup>3)</sup>當時は餘程海濱に近かつた事を示すものであらう。米多、神埼地方及肥前國府の所在地なりし佐賀市北部地域一帯に見る東西南北の縱横の溝渠は、正に條里に従ひて起れるものにして、其の呼稱の今尙残れるもの少くない。此の地域は山麓に近く、灌漑水得易く、花崗岩砂の壤土にして、排水良好なれば、最初に開發さるに至つたものであらう。溝渠の大きさは、幅二・三米、深さ、一、二米にして、一町若くは二町の間隔をとりて、整然と分布された條を殘してゐる。

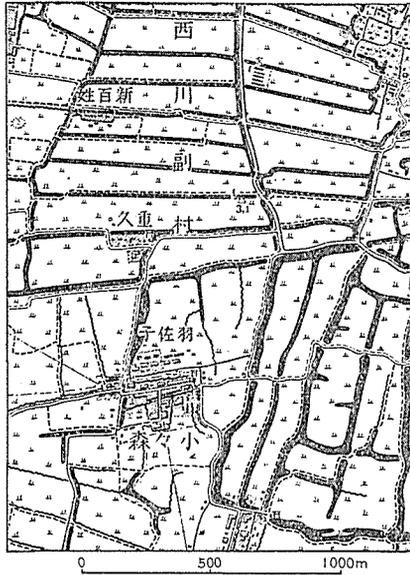
奈良朝末よりの墾田の獎勵は、大化改新の土地公有制の破壞を導くに至つたが、開墾適地廣かりし此の平野には、承和三年神埼郡の空閑地六百九十町を以て、勅旨田とせられしを始めとして、大小の莊園續々として現はれしものゝ如く、元慶年間に至れば、時の國司をして、「班給の制は廢れ、國領の調物缺少し、戸口減損し、免課之門、徒に田疇有る」<sup>5)</sup>の非を訴へしむる有様となつた。天慶四年藤原純反の太宰府占領、寛仁三年の力伊の入寇以來、九州の治政益々弛み、府司國司等が土着して豪族となるもの多く、遂に鎌倉幕府の開かるゝに至りて新補の地頭も加はり、又多くの寺社と共に、競ひ

て新墾に務めしものゝ如くである。正應五年肥前一國の公領莊園に互りて用途を分課せし、同國一宮淀姫神社の注進狀<sup>6)</sup>によりて、當時に於ける佐賀、神埼、三養基の諸郡の田數を計算して、現耕地面積と比較すれば、殆んど六割に達する。以て鎌倉末に於ける平野開發の程度を知る事ができるであらう。偕、國郡時代に於ける平野の開發は主として、國家の手によりて統一的計畫の下に大規模に行はれ、従つて、灌漑溝渠が一定の形式を有した事は上述の如くである。然るに莊園時代に至れば、村里に割據する諸小豪族を中心として開拓が進められた爲に、規模小にして又各地獨立的に行はれたと思はれる。無統一にして錯雜せる溝渠を有する平野の中央部を以て、我々は當時の開發になるものと推定する。即ち、此の地域は概ね低濕なれば、多くの江湖も殘存せしなるべく、開發に際しては、之等既存の水路を其儘灌漑排水溝渠として利用すると共に、又多くの局部的にして連絡なき溝渠を作り加へられたものであらう。而して、此の地域に發達する聚落には「牟田」を字とするものが多く存する。牟田とは後世稻一毛作のみよりなし得ざる濕田を呼ぶ名稱なれば、是等の地



渠溝の域地田牟部北町河柳 圖五第

域は、その開發の初期に於ては、正に濕田なりしなるべく、此處に發生するに至つた聚落も亦牟田と呼ぶるゝに至つたものであらう。斯くの如くして、平野内部の開發進み、未開地減少せる結果、今や是迄蘆荻の叢生に委棄されたりし瀕海の鹵地が、早くも開墾の對象となるに至つた。正應元年日附の肥前國高城寺宛の寄進狀の一通には、「同國河副莊米津土居外干潟荒野一所事」と題され、瀕海の鹵地



第六圖 瀕海開拓地城溝渠

が贈與賣買される價值を有してゐた事が明かである。更に其の四至として擧ぐる所は、次の如くである。

限東米津並東故衙土居 限南米津土居

限西南里前道干潟 限北南里土居

南里は佐賀市南方の東、西、南里にして、米津は米納津、東故衙は東古賀であらう。此等の地は、今や海岸を去る七籽半の所にあれども、

當時にありては海濱にして、米津は名實共に米の積出港なりしと思はれる。土居と言ふは堤防の義にして、瀕海地の開發に當りては、先づ之を繞らして潮汐の侵入を絶つ事が必要である。次に瀕海地は極めて低濕なる爲に特に排水の要がある。斯くて、新開地の外廊を劃する廣大なる排水用溝渠を掘り、

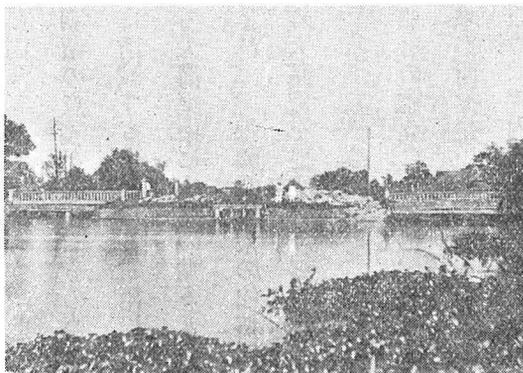
其の土を利用して土居を築いたであらう事は想像に難くない。干潟は一般に海岸と平行して發達するもので、その開發も亦平行的に前進して行つた筈である。斯くて此の地域に於ける灌漑排水溝渠は海岸線の方向と關係を有し、略東西若くは南北の方向をとる密接する平行水路と、それに直交して連絡の役をなす間隔大なる水路との組み合はされし形式を有つ。佐賀、若津、柳河を結ぶ一線以南の地域一帯の溝渠が、南里、米納津附近のそれと類似の形狀を有するは、又その起源の同じき事を物語るものにして、該線以南は瀕海地の開拓の結果になれるものと推定する。一般に平野の南方程、山地よりの灌漑水の供給困難となれば、溝渠は漸次貯水池的意義を増大して、その規模大となり、幅員十米深度五米以上に及ぶもの少くない。

鎌倉末に於ける開墾適地の減少も一原因となりて、元寇以來經濟的に逼迫しつゝありし地頭等は、衰運に向へる寺社の所有地を蠶食し始め、又互の爭奪となり、中央に於ける南北朝の抗争は、西陲にも波及し來りて、平野は戰亂の巷と化するに至つた。斯くて平野の農業は多大の妨害と破壊を受けたであらう。然し此の混亂時代の後期に至れば、土豪等も兵糧の獲得の爲に農業を保護し、農民自らも一揆<sup>10)</sup>をなして不法行爲に對抗するもの現れし程にして、平野の農業は破壊されつゝも、反面に於ては維持建設の努力が拂はれてゐたと思はれる。而して筑後川の沖積作用は、世の治亂に拘らず、不斷に營まれて干潟は遂次生長しつゝあつたのである。その開發はこの期に於ても行はれしものゝ如く、北

肥戰誌によれば、戰國時代末に於ける海岸線は、筑後川左岸にありては榎津南方の一木より、右岸は犬井道、飯盛に至り、鎌倉時代末の南里米納津線より進む事三籽餘である。鹿ノ江、犬井道間の水田に平次郎籠、孫左衛門籠等の名稱を存するは、その開發當事者の名に因みしものであらう。此の地域の溝渠が特に巨大なるは、開拓が漸次進むに従ひ、内部の堤防は、潮留の意義を失ひ、その高さを自然に低下するに至り、兩岸に堀を伴ひし結果は、岸崩れて遂に堀中に消滅する事となり、兩岸の堀が合はされて一つとなつた爲である。現時小々森、咄分、吉村を連ぬる大溝渠中に中島の點々として斷續せるは、往時の堤塘の名残りである。鹿ノ江なる威徳寺の舊記によれば、戰國時代末の佐賀城主たりし龍造寺隆信は、此の堤塘上に潮害無からん事を祈念して、七社の天満宮を建立せりと言ふ。前記諸村に於ける神社の位置は恰も之に一致して居る。

平野の開發に於て一時期を劃せるは近世の初頭である。蓋、徳川幕府の確立によりて、天下太平に歸し、もはや侵略によりては領土擴張の不可能なるに際し、戰國以來泰西文化の傳播により進歩せられた築城土工の技術を應用して、更に未だ消えざる勃々たる瀟氣を以て、國內の開發が行はれたのである。恰も良し、筑後には新進氣鋭の田中義政封せられ、肥前にありては鍋島氏の家老に成富兵庫茂安あり、彼は日頃加藤清正と親交ありて共に築城土功に従ひし事が多かつた。斯くて今や彼等は相競ひて、多分の新地を見立て、水旱なき様に水路を見計り、或ひは時を計りて水分を定め、或ひは堤を

築き水を湛へ、萬代不易の業を残す<sup>11)</sup>に至つたのである。肥前に於ける川上(嘉瀬)川と城原川の間の背振山麓には、著しき構造谷無ければ谿流も亦發達せず當時迄尙原野廣く殘存してゐたが、成富茂安は川上、城原兩川の將に山地を辭して平野に入らんとする地點に於て、前者より市の江川を後者より横落水道を分水し來りて灌漑に便じ、二町三町宛百姓に割付けて開かした。今此の地に和泉野、中野、傍野等の聚落起りて、兵庫村と稱せらるゝは彼の名に因めるものである。又神埼町東部の田午川にありては、その上流背振山分水界附近に於て、北斜面に流入する谿水を、山腹を掘鑿して導き來り水源を潤澤ならしめてゐる。筑後にありては、本地域の灌漑用水路の幹線なる山井、花宗、<sup>18)</sup>太田等の諸川を矢部川より分水するに至り、殊に太田川水の供給により干潟の開拓大いに起つた。河口村新田より七ツ家の八ツ家を経て、濱武村崩道に至る本土居は田中義政の築く所<sup>12)</sup>で、紅粉屋開は元和八年、安本新田は寛永元年になつてゐる。尙平野各地の河川及び溝渠にある樋管並びに堰埭等は、この頃より始められしもの多く、斯くて、之等によりて水利の統制を行ふ事となつた。爲に從來各地獨立して只天水を溜むるに過ぎなかつた多くの溝渠



第 七 圖 花宗川の樋管と堰埭

は、連絡されて灌漑水の供給を受け得る事となり、これ迄旱魃によりて收穫不定なりしものが、一躍化して良田となり、平野の生産力は大いに増加するに至つたものと思はれる。



築後川と成富安の堤防 第八圖

し築後川の暴流も、今や成富茂安によりて制御せらるゝ事となつ

た。即ち、築後川右岸北部の千栗八幡宮下より、南は坂口に至る延々三里の間、敷三十間、高さ四間、馬踏み二間の大堤防が、前後十二ケ年の長年月を経て、寛永年間に竣工せられたと傳へらる。この地點は、築後川が久留米地峽より、下流平野に入り來りて、東西より南西への方角轉換の位置に當る。洪水に際して、西奔佐賀を犯す水勢を防ぐには、正に急所であつて、更に數百石の沃野を捨て、遊水地の設備をなし、堤防の屈曲率も現代の水力学に叶つてゐる事は、以て當時の築堤技術を窺ふに足る。爾來三百年、肥前平野の水

害は大いに減少せられ、土人今尙之を徳として、北茂安、南茂安の兩村は彼に因みて名付けられた。之を始めとして、築後川沿岸の築堤は漸次行はれしものゝ如く、肥筑兩藩相競ひて、沿岸湿地、三角洲の開發に務むる事となつた。右岸の浮島は、名の如く當時は河中の三角洲であつたが、慶長十五年

筑後民此處を占領し、天和三年菊池一家、移住して子孫繁榮して今日に至る。その南方道海島も同じく、慶長十五年筑後の所轄となつた。慶長の肥前國圖に據れば、之等の島は、その對岸の村名によりて、前者を林慶島、後者を黒島と呼んでゐる。その後の河道變遷は、この兩島を完全に右岸に附着せしむるに至つた程であるから、肥前民によつて開發さるゝが自然であつたらうと思はれるが、斯くの如く筑後側の占領に歸したのである。之は、當時筑後には田中義政在國し、彼は關ヶ原の功臣であり、一方肥前は嘗て西軍に屬せし外藩であり、兩者の幕府との親疎の間隔が、肥前農民をして、泣寝入せざるを得ざらしめし爲であらう。河口の大三角洲は始め二個の島として顯はれたものが後に連結せられて一島となつたもので、文録の頃より、北部に筑後の農民輩を植ゑて潟地の成長を待ち、寛永十年に至つて新田を築いたと云はれる。肥前民も南の島に據つて潟地の埋立を始めたようである。今や、筑後にありては田中氏除かれ、立花氏再封されし時であり、立花氏は關ヶ原役後柳河に籠り、關東に歸順した肥前軍の攻撃を受けて開城せる事あり、兩藩の地位逆となりし爲に、肥前側讓らず、遂に北部は大野島と稱して柳河に南部は大詫間と稱して佐賀に屬する事となつた。斯くの如き不自然なる境界は二重鎖國の封建治下に於て嚴然と維持せられし結果、今尙福岡佐賀兩縣界をなす。

斯くて平野は近世初期に於て、殆んど餘す所なく開發し盡され、唯本地域の東部なる西牟田村の洪積臺地が寶曆年間に開墾されし以外は、徳川時代を通じて、農業地域の發達は海岸に於ける干潟の干

拓地に於て見られたのである。殊に、その中期以後、藩の財政窮乏を告ぐるや、新田開發は最も有利確實なる富源なれば、佐賀藩の如きは、其の殖産興業局とも言ふべき六府方、之を直營した。六府方搦の名を傳へるものはその干拓に係はるものである。更に明治新政府に至りて、封建制度瓦解の爲失職せる武士階級を歸農せしむる必要に迫られて、當局が第一に着手するに至りしものも、やはり拓地開墾にして、授産社搦の名今に存するは之に基く。之等の新田は後期になれるもの程、その規模大にして、灌溉排水の溝渠は極めて計畫的となつてゐる。

之を要するに、筑後川下流平野は、其の始、蘆荻叢生せる廣漠たる沼澤干潟の地であつたが、山麓地域より漸次開拓進み、遂に鎌倉末期に及んでは略平野内部の開墾成り瀕海地方の新田が現はるゝに至つた。而して近世初期に至りて平野は完全に水田化され、その後は干潟の干拓を以て今日に及んでゐる。現時、本地域内佐賀縣側に於ける工事中のものは五百六十町<sup>10)</sup>、見込地は八百町<sup>15)</sup>に達してゐる。實に、本邦諸平野の多くは、最早耕地の擴張見込僅少<sup>16)</sup>となりし時に當り、古來の開墾なる筑後川下流平野が獨り、今尙開墾適地廣大にして、米作地としての重要性を益々増加し得るは、是れ主として、筑後川の沖積作用に負ふ處である。本地域の開墾に有する筑後川の意義は、エヂプトに於けるナイルのそれにも比肩し得るであらう。

(1) 播磨風土記 攝保郡佐岡の條

筑後川下流平野の開墾

第十七卷 第一號

五一

- (2) 日本書記 繼體天皇二十一年の條
- (3) 肥前風土記 三根郡米多郷の條
- (4) 續日本後記 承和三年
- (5) 三代實錄 卷三十九
- (6) 淀姫神社進狀考注 歴史地理四卷 萩岡良弼氏
- (7) 田賦考 佐賀鍋島家内庫所藏
- (8) 佐賀文書彙 高城寺文書
- (9) 古事類苑 地部 筑後國歷世古文書
- (10) 北肥戰誌 二八四頁
- (11) 成富茂安家譜
- (12) 南筑明覽 七十頁 筑後地誌叢書
- (13) 福岡縣三潯郡誌 六二六頁以下
- (14) 鍋島直正公傳 第一卷 八一頁
- (15) 佐賀縣統計圖集 昭和四年
- (16) 土地利用及開墾事業要覽 第六次
- (17) 第六圖參照
- (18) 第五圖參照
- (19) 第二圖參照